これは
黒ギャルですわ？
いいえ
ダークエルフですわ
〜マジ卍な異世界生活〜
市村鉄之助
挿絵／LaoMeng
2DB
二次元ドリーム文庫
試し読み版

プロローグ　迷い込んだ少年　006
第一章　黒ギャルサーナの興味津々セックス　014
第二章　後輩系白ギャルとダンジョンセックス　070
第三章　ロリギャルビッチは愛のあるセックスを知らない　129
第四章　ギャルとビッチは大好きな少年の赤ちゃんを孕みたい　174
エピローグ　それから　252

登場人物紹介

サーナ
幸人が出会った黒ギャルの格好をしたダークエルフ。
アリア
幸人が出会った白ギャルの格好をしたエルフ。後輩属性。
天野幸人（あまのゆきと）
異世界に迷い込んだ少年。
ジュリ
元魔王なサキュバス。宝石でデコったダンジョンに暮らしている。

プロローグ　迷い込んだ少年

「ここはどこなんだ!?」
天野幸人（あまのゆきと）はダンジョンの通路を全力疾走していた。
学校から帰宅して自室でうたた寝をしていたら、いつの間にか見知らぬ場所にいた。
四方八方が石造りの壁に囲まれながら、不思議と明るいこの場所に見覚えがあった。ダンジョンだ。
ゲームやコミックの架空の世界でしかお目にかかれないものが、なぜ自分の眼前に広がっているのかわからない。
そして、
「誰か助けてぇえええええええええっ！」
どうしてモンスターの群れに襲われなければならないのだろうか。
走りながら背後を振り向けば、ゴブリンが数体追いかけてくる。棍棒や錆びた剣を手に持ち、醜悪な匂いを撒き散らしながら、低い声で鳴いている。濃い緑色の身体は小さく、成人男性の腰までしかない。
ボロ布を重ねた腰巻からは、決して小さくない肉棒が勃起（ぼっき）状態で飛び出している。

幸人を餌として見ているのか、それとも性的に見ているのか不明だが、どちらにせよ捕まれば悲惨な目に遭うだろう。

（食べられるのも、犯されるのもごめんだ！）

すでに十五分ほど追いかけっこを続けているが、ゴブリンたちは諦める気配などなく、逃げれば逃げるほど、獲物である少年を追い詰めようと躍起になる。

ダンジョン内をだいぶ走っているが、誰一人として人間の姿はない。もし、ここが本当にダンジョンの中であるのなら、勇者とはいわないが冒険者くらいいて欲しいと思わずにはいられない。

「せめてっ、ダンジョンの外に逃げることができれば――あっ、しまっ……」

全力疾走を続けたせいで、足に疲労が蓄積していた。それだけではない。精神的にも限界が近かった。そのせいでなにもないところで、足をもつれさせて幸人が転んでしまう。

地面に肩を強打し、転がる。痛みで呼吸が止まりかけるも、それでも立ち上がろうとした。そうしなければ、すぐにゴブリンたちに捕まってしまう。

（ちくしょうっ、ダメだ、身体が動いてくれない！）

足が震えていうことを聞いてくれない。疲労のせいか、それとも迫りくる恐怖のせいなのかは幸人にはもうわからない。

顔だけをなんとか上げて背後を向くと、醜悪な笑みを浮かべたゴブリンたちが、手に持

つ武器を壁にぶつけながらゆっくりと近づいてくる。
脳裏に最悪の光景が浮かんだ。悲鳴をあげなかったのは、せめてもの抵抗だった。
ゴブリンが迫り、幸人は身体中を支配している恐怖心から逃げようと目をつぶった。
その時だった。
「ちょっと、意味わかんないし。ゴブリンがどうしてダンジョンの中層部にいるの？」
「ウチに聞かれても知らないっすよ。あの人のせいじゃないっすか。ほら、キモいちんこ押っ立てて襲おうとしてますし」
「あーね、最悪じゃん。ってか、ゴブリンが男の子を犯そうとするとか、マジウケるんですけど」
女の子の声がして、恐る恐る目を開けると、倒れた幸人を見下ろすようにギャルが立っていた。
（――なんでダンジョンにギャルがいるんだ!?）
だらしなく着崩したブレザー姿の少女は、日に焼けたように肌が黒い。下着が見えそうなほど短いスカートから覗く長い脚にはストッキングとローファーが。腕にはヒョウ柄のシュシュをつけている。
突然過ぎる黒ギャルの登場に驚きを隠せない幸人だったが、思わず少女に目を奪われてしまい言葉が出ない。

整った鼻梁と、リップを塗った形のいい唇を持つ少女はややつり目でキツい印象こそあるが、文句なしの美人だった。
ギャルとは縁がなく、どちらかといえば苦手なはずの幸人でさえ、思わず生唾を飲み込んでしまう。
脱色を繰り返したのか、灰色の長い髪をアップにまとめており、快活さも感じ取れる。なによりも目を引くのは、制服の下に隠された大きな胸だ。ボタンを開けた胸元から覗く谷間は深く、控えめに見ても巨乳だとわかった。
指や手首に嵌められたアクセサリーの多くはきらびやかなものが多く、少女がその類を好んでいるのだろう。
「ねえ、アンタ、だいじょーぶ？」
「あ、はい」
「そ。ならよかったじゃん。いくらゴブリンが雑魚だからって、なんかしらないけど興奮しまくってるし、捕まったら掘られてたっしょ」
少女の言葉に、やはり性的に食われそうになっていたのだとわかると、背筋に冷たい汗が流れた。
「男と話したいのもわかるっすけど、とりあえず襲いかかってきそうなゴブリンなんとかしたほうがよくないっすか？」

黒ギャルは面倒臭いとばかりに嫌そうな顔をした。
もう一人の少女は、黒ギャルではなかった。格好こそ似ているが、だらしなさはなく、ブレザーの下に着ている大きめのベストがよく似合う、可愛らしい少女だった。
先の少女と大きく違うのは、肌は白いことだ。白ギャル、という言葉が浮かぶ。
背丈も小柄で、年齢は十代後半に見えた。メッシュを入れたブロンドの髪は短く、口調といい、どこか体育会系の子が思い浮かぶ。
「じゃ、お願いするっす。ウチは、この人のこと守るんで」
白ギャル少女が愛嬌のある顔に笑顔を浮かべると、黒ギャルが嫌そうな顔をした。
「はいはい。やればいいんでしょ」
不機嫌な顔をした少女は褐色の腕をゴブリンたちに向けると、表情が一変して獰猛になる。
「お前らエンドってるから。つまんないことに巻き込んだこと、後悔してから死んじまえ！」
少女の手のひらを中心に、赤い魔法陣が幾重にも展開していく。にぃ、と褐色の少女が笑みを強めると、整った唇を大きく開いた。
「穿て炎、灼熱の業火で全てを焼き払っちまえ――マジ卍っ！」
詠唱を介して、魔法陣がさらに赤く、熱くなる。次の瞬間、轟っ、と音を立てて、炎の

濁流が放たれた。
人が十人並んで歩けるほどのダンジョンを炎が埋め尽くし、ゴブリンを飲み込んでいく。
（ま、魔法!?　てか、どうしてギャルが魔法を使うんだ!?　なんでギャル語で魔法が発動するんだよ!?）
緑色の化け物たちは、逃げることもできず、助けを求めることもできないまま、炎に包まれ灰となった。
「あー、だるっ。んで、アンタ大丈夫？」
炎の余波が残るダンジョンの中で、黒い肌の少女が硬い笑みを浮かべて声をかけてくれた。
（あれ？）
幸人は唐突に違和感を覚えるが、それがなんなのかわからない。
「ほら、立ちなって。腰抜けたの？」
「なんていうか、この人って冒険者っぽくないっすね」
少女たちが手を差し伸べてくれるも、幸人は助けられた安心のせいか、張り詰めていた緊張の糸が切れ、意識が薄れていくのを人ごとのように感じていた。
「ちょ――」
なにか少女たちが慌てる中、幸人は違和感の理由を見つけた。

（どうしてこの子たち、耳が尖ってるんだろう。これじゃ、ギャルじゃなくて……エルフだ）

そんなことを思いながら、意識を失ったのだった。

すぐに硬くなった逸物を隠そうとするも、それよりも早く少女の手が股間に伸びる。
サーナの細い指が硬くなった陰茎を掴み、
「――うっ」
危うく絶頂しかけた。
「うわっ、すっごくカッチカチなんですけど……それに、でかっ！　こんなの入れたら壊れんじゃね？　ちょっとビビったかも」
にぎにぎと指をぎこちなく動かされ、刺激が波のように襲いかかってくる。誰かに触られたことなど一度もない男根が、美しい少女にいたずらされて喜んでいた。
「ちょっと安心したかなー。ユッキーってギャル苦手な感じがしてたから心配だったんだけど、全然問題なしっしょ。若いんだから我慢とか身体によくねーし。ほら、黒ギャルの未使用割れ目にちんちん突っ込めるチャンスとか超ラッキーっしょ？」
「それは、嬉しいけど……あ」
「ししっ、本音出たじゃん。あ、でもね、誤解しないでね。ユッキーを慰めたいのはマジだから。アタシ、あんまし男と接したことないから、どうやって慰めていいのかわからないのもホント。アリアがいうには、身体使ってスッキリさせればオッケーらしいし？　あの子、経験超豊富だから信じておけば問題ねーから」
恥ずかしさはあるのだろう。それでも笑顔と優しさを幸人に向けてくれるサーナからい

じらしさを感じる。
　内心では彼女の身体にむしゃぶりつきたい衝動が渦巻いている。しかし、それをしないのは、サーナが自分のために身体を使ってでも慰めようとしてくれているからだ。
「本当にいいの？」
「もち。むしろ、ユッキーじゃないと嫌だっつーか」
「え？　それって？」
「違うし！　へ、変な勘違いしないでくんない？　そりゃ誰でもいいわけじゃねーし、ユッキーならって思ったけど。アタシは別に出会ってすぐ惚れるとかチョロくねーし。ほら、なんつーの、嫌いじゃない感じ？　そうそう、そんな感じじゃん！」
　目に見えて動揺するサーナに思わず笑みがこぼれた。
「わ、笑うんじゃねーよ！」
　おかげで気が楽になった。サーナは慰めるために身体を差し出そうとしてくれるのかと思っていたが、彼女の言葉通りそれだけではないのも本当のようだ。
　根本は幸人を元気付けたいのだろうが、よい機会だから自分も破瓜を迎えて大人になりたいという考えも事実だろう。
　セックスというものを難しく考えていた童貞少年にとって、軽いノリで誘われたセックスは驚きもしたが、身構えなくていいのだと身体から力が抜ける。

「俺もサナがいいな。エッチするならサナとがいい」
「……なにそれ、不意打ちじゃん。ちょっと胸キュンしちゃったんですけど」
サーナが気づいていたように、縁がなかったギャルのことは少しだけ苦手だった。だが、サーナたちのおかげで、外見ではなく、中身が大事なのだと偏見を捨てることができた。
今のように、遠慮なくいいたいことがいえる相手は貴重だ。出会ってからの時間が全てではないことも学べた。
（……それに、サナの体つきってエッチだし、ギャルはまだ苦手のままだけど、サナだからこそ興奮する）
「ユッキー」
股間を離さないまま、ゆっくりとサーナの顔が近づいてくる。
もう言葉はいらなかった。幸人もゆっくり彼女に近づき、唇がそっと触れ合ったのだった。

※

「んっ……初めてキスしたじゃん。なんか、胸がキュンキュンするんですけど」
一度触れ合った唇同士が離れ、照れた顔をするサーナに、幸人は二度、三度とキスを繰

り返していく。
「ちょっ、んんっ……ユッキー、んっ、ちゅっ、ちゅう、んちゅうっ、急に積極的だし、ちゅぅ」
啄ばむようなキスから、回数を重ねるごとに濃厚に変化していく。
二人は自然と、次の段階に進みたいとお互いの舌を求めあった。
「れろぅ……ちゅうぅっ、んちゅう……なにこれ、ちゅるうぅ、ベロ、超気持ちぃ……」
唾液に濡れた舌が触れ、絡みあった。初めて味わう女の子の唾液に、興奮がさらに高まっていく。呼吸するのも惜しいくらい、舌と舌の愛撫を繰り返した。
（――っ、脳が溶けそうだ）
甘い唾液を味わい、口内を舌でかき回す度、味わったことのない快感が届き、おかしくなりそうになる。
少年の舌は、少女の歯茎を撫でるように這う。
「ちゅうぅ、んちゅうぅちゅう、ちゅるうっ……ぷぁっ、んちゅるぅ……」
サーナは整った唇の隙間からわずかに酸素を求めるも、呼吸など二の次とばかりに少年の口を吸う。
少年の舌が口内で動く度、少女の下腹部に熱が宿り、疼く。
男根を握る手はそのままに、空いている片手で、甘い痺れを与えてくれる少年の腕を掴

んで引き寄せた。
幸人の腕が導かれたのは、サーナの双丘だった。
（なにこれ、すごく柔らかいっ！）
キャミソールの上から触れた大きな胸は、張りがあり弾力がすごいにもかかわらず、心地いい柔らかさだ。
「……んっ、ユッキー、ちゅぅうっ、揉んでいいよ。ずっと、んちゅっ、見てたっしょ？」
女の子は視線に敏感だと聞いたことがあるが、本当のようだ。何度も豊かな胸に視線を向けていたことがバレた恥かしさはあったが、それ以上に許しを得た喜びが勝った。
遠慮などしないとばかりに、両手で少女の胸を鷲掴む。
「――ちょ、強いし。乱暴にしないで……お返しじゃん、あむっ、ちゅうぅー」
強く握ってしまったせいで痛みがあったのか、仕返しとばかりに唇に歯を立て、吸いつかれてしまう。
小さな痛みが走るも、大したものではない。むしろちょっとした変化は繰り返す、キスのスパイスとなってくれた。
「ちゅうっ……アタシの、胸っ、んんっ、大きくて柔らかいっしょ？　アリアが羨むほどだから、自信あるし。ちゅっ、ちゅ、ちゅうっ」
絶え間なく唇と舌を動かしながら、自慢の巨乳を誇るサーナ。彼女のいう通り、ずっと

揉んでいたいほど柔らかい。
（だけど直接触りたいっ！）
少年は願望を叶えるため、キャミソールをたくし上げた。
「――きゃっ、ちょっ、いきなりだしっ！　もっと優しくっ、んっ、ダメっ、ユッキーっ、先っぽいじめないでぇぇっ！」
桜色の乳首は硬く勃起し、興奮していることを主張しているようだった。
褐色の肌によく映える薄い色の乳輪は大きめだ。好奇心のまま先端を摘むと、少女が唇を離して甘い悲鳴をあげた。
「ダメだってばっ、あああっ、引っ張らないでっ――ひうっ、強いって、強いからっ、ユッキーっ」
優しく愛撫するよりも、少し痛みを与えたほうが少女の反応がいいことに気づいた幸人は、手探りで強めの刺激を与えていく。
痛みだけを与えるのではなく、サーナが喜ぶことを前提に、感じる場所を探していく。
「んんっ、ユッキーっ、痛いよぉ……もっと優しくしてよぉっ……あんっ」
「でも気持ちよさそうだよ？」
「違うしっ、違うからっ――んんんっ、どうしてぇ……痛いのに、優しくして欲しいのにぃ……ピリピリするぅ」

認めようとしないが、間違いなく少女は痛みに快楽を覚える体質のようだ。
弱点を見つけた少年は、気をよくして少女の胸に顔を近づけ尖った乳首に吸いついた。
「――んっあああああっ！」
背筋をピンっ、と仰け反ったサーナに少年は驚いたが、息を荒らげて呼吸する少女が次なる刺激を求めているとわかり、口愛撫を続けていく。
「ペロペロしないでよぉっ、くすぐったいからっ、ちょっ……ムズムズするっ、ああっ、ビリってしたっ、ビリってしたから！」
優しく乳輪に舌を這わせていた少年が、乳首に強めに吸いつくと、再び甘い悲鳴があがる。少女の下半身は震え、振動が伝わってくる。
強い刺激に身悶えながら、サーナは嫌がる気配などなく乱れた呼吸を繰り返している。
「ユッキー……口が寂しいし……ちゅーしよぉ」
キスを求められた少年は嬉しそうに応じた。舌と舌を絡めさせ、どちらのものかわからなくなるほど混ざりあった唾液を嚥下する。
「んくんっ、ちゅううっ、んちゅっ、ちゅちゅっ……もっとっ、もっとちゅー」
舌ったらずな声を出して、続きを求める少女の口内を舌で蹂躙していく。
もう彼女の口の中は、少年の舌が届いていない場所がない。
「ちゅううっ……んっ、んちゅうっ、ちゅるるぅっ……んんんぅ」

唇を貪りあう度、興奮が高まっていく。黒ギャル少女の口周りは唾液に塗れるも、彼女の美しさが陰ることはない。
いやらしさが相乗効果を起こし、なお魅力的に見えた。
唇を離すと、サーナが名残惜しそうな目で見てくる。
(できればもっとしていたいけど……)
少年は次の段階に進みたかった。痛いほど硬くなった男根は、未だ少女が握っているためいつ暴発してもおかしくはない。
いくら少女の手による刺激だったとしても、パンツの中で射精するのはごめんだった。
唾液の糸を引きながら、幸人は再び褐色の胸にしゃぶりついた。
「んんっ、ユッキーったらおっぱいばっかり吸って、まるで赤ちゃんじゃん。ママのおっぱいおいちいでちゅかぁ?」
依存してしまうのではないかと不安になるほど、少女の胸は揉んでも吸っても快楽に直結している。
からかうようなサーナの声に、頬が熱くなるも、彼女の声に艶があることは聞き逃していない。
(サナだっておっぱい吸われて感じてるんだな)
自分の愛撫が女の子を気持ちよくしている事実に、満足感がじわじわ湧き出す。

「ちゅーちゅーするなしっ、んんっ、あああっ、またビリって！　ダメだってばっ、ユッキーっ、アタシのおっぱい壊れちゃうぅ！」

想像以上に乳首が敏感なサーナの喘ぎが、少年を誘う。ダメだといわれても、彼女の抵抗が本気ではないことなどとうにわかっていた。

「お腹熱いよぉ……はあっ、んんっ、おっぱいも……ジンジンするしっ、んんっ、あああんっ、なんか、変じゃん、身体が変なのぉ！」

たわわな乳房を揉みながら、乳首を吸って、舐め続けていると、少女に変化が訪れた。

快感を得ているのは変わらないが、今までと反応が違う。なにかに戸惑っているような声と、身じろぎの理由は少年にはわからない。

しかし、サーナがそんな身体の違和感を嫌がっていないことだけは伝わってくる。

さらなる刺激を与えんと、幸人が乳首を強めに吸いつくと、

「ちょっ――それっ、やばいからっ！」

サーナの腰が大きく跳ねた。

「変じゃん……また大きくビリってしたぁ……変だよぉ、こんなの知らないしぃ……」

痛みではなく、大きな快感を味わった少女の声は蕩けていた。

強い刺激がサーナに気持ちよさを与えることはわかっていたが、想像以上かもしれないと考える。

（もしかしたら、サナってマゾっ気があるのかな？）
そんなことを考えた幸人は、恐る恐るだが、しっかりと少女の乳首に歯を立てた。
「――んんああっ、ああああああああっっ」
刹那、少女の背中が弓反りとなる。今までにない悲鳴をあげ、身体を大きく痙攣させたサーナはそのままベッドへ背中から倒れ込んでしまう。
「……はぁ、はぁ……こんなの、しらないし……目の前、真っ白になっちゃったじゃん」
少女の言葉から、彼女が絶頂を迎えたのだとわかった。
呼吸を荒らげ、胸を大きく上下させた少女の姿はあまりにも無防備になっていた。足を広げているせいで、紫色のショーツのクロッチ部分に大きなシミができているのがはっきりと見えた。
秘部に貼りついたショーツは、女の子の大切な形を浮き上がらせていた。
――ごくり。
思わず生唾を飲み込んでしまう。
布一枚越しに、少女の割れ目があるのだとわかると、頭が沸騰しそうになる。
「……ユッキー、すっごく見てるし。めっちゃ恥ずかしいんですけど……」
「ご、ごめん！」
「別にいいし。……脱がせて？」

「……いいの？」
恐る恐る問う少年に、少女は小さく頷いた。
緊張で震える手を伸ばし、紫色のショーツに手をかけた。
「――ん」
サーナがわずかに身じろぐも、幸人は興奮と欲望に任せてショーツを引っ張る。
それに合わせてサーナが腰を浮かせると、驚くほど簡単に、少女の秘部が露わになった。
（これが、女の子のアソコっ！）
褐色の肌に包まれた割れ目は、汚れを知らない薄紅色だった。
透明な蜜をこぼしながら、テラテラと光る陰部は未経験のせいかピタリと閉じている。
「うわ……くっそ恥ずかしくて死んじゃうんですけど……」
小さな声でそんなことをいいながら、手で顔を隠してしまうサーナがかわいらしくてたまらない。
指で割れ目をなぞる。
「んっ、んんっ、はぁああっ、だめっ」
羞恥か、刺激のせいか、太ももを閉じられてしまった。
「サナ、もっと触っていい？」
「別にいいけど……優しくしてよ。痛くしたら、魔法ぶっ放すから」

許可ももらったので、足の間に座り少女の陰部を指で広げた。
「ううううっ……なにこれっ、死ぬほど恥ずかしいんですけどっ！」
まだ刺激を与えていないが、未使用の割れ目を異性に見られることは、少女が想像していたよりもずっと羞恥を掻き立てるようだ。
恥じらって「うーうー」唸る少女の仕草が実に可愛らしく、魅力的に映る。
サーナの膣は愛蜜に濡れており、難なく挿入できそうだった。しかし、初体験ということで女の子の場合は痛みを伴うと聞く。ならば、しっかりほぐしておいたほうがいいのではないかと思う。
（舐めたほうがいいよね？）
聞き知った行為を思い出し、そっと顔を少女の股に埋めると、未使用の割れ目を舌で舐めた。
「――っっっ」
声にならない驚きが少女から伝わってくる。舐められたことが想定外だったのか、それともただ驚いただけなのか。
少し待ってみたが抵抗も、嫌がる素振りもなかったので、再び舌を割れ目にそって這わせていく。
膣蜜が舌に絡みつき、少女の秘部の温もりが顔に伝わる。

（これが……サナのアソコなんだ……）

狂おしいほどの興奮のせいで味までわからないのが残念だった。舐めても舐めても溢れてくる愛蜜を舐めとろうと舌を動かし続けた。

「……あああっ、んぁあっ、ユッキーっ、やばいってっ、それっ、やばいっ！　アタシっ、おかしくなるからっ！　身体っ、バラバラになっちゃうからっ！」

舌愛撫を繰り返すと、少女の腰が浮き、辛そうな声が発せられた。

味わったことのない快感に戸惑い、恐れ、不安になるサーナだが、決してやめろとはいわなかった。

浮いたお尻を掴んで、舌だけではなく、口で直接吸いつくと、蜜の量が増した。

「すごいっ、こんなのっ、しらないしっ！　電気走るっ、身体中にっ、電気走るからぁ！」

つま先を立て、腰を動かし続けるサーナの割れ目からは、蜜が勢いよく噴き出し少年の顔を濡らしていく。

打てば響くように喘ぐ少女の視界は安定せずに揺らぎ、気を抜けば失神しそうなほどの刺激が次から次に襲いかかってくる。

痺れるような快感は、電気のようで、身体中がどうにかなりそうだった。

先ほどまでしていたキスのような初々しさなどもう消えた。今は、ただ快感のために貪られている感覚しかない。

だが、嫌ではなかった。このまま快感を与えられ続けたら、間違いなく壊れてしまうと不安になるも、幸人になら壊されてもいいと思ってしまう。

出会ったばかりの少年のどこに、こうものめり込む要素があるのか自分ではわからないが、初体験を一緒に経験したいと思えたことといい、少なからず彼のことが好きな自覚はある。

それがどの程度の強さまでかは不明だが、自身の愛液まみれになりながらも、丁寧に舌愛撫を続ける少年を愛おしく思うほどは想っている。

「ユッキーっ！　なんかくるっ、すごいのくるっ！」

喘いでいる余裕もなく、助けを求めるように少年の名を呼ぶ。

普段、一人遊びをすることもない処女だったダークエルフには、再びくる快感の高波が絶頂だと知らない。

「またきちゃうっ、真っ白になっちゃうしっ！　ユッキー、ユッキーいっ！」

舐められ、吸われ、女の子にとって敏感な秘部を容赦なく責め立てられ続けたサーナは、

「だめぇえええっ、もうぉおおっ、んぅあああああああああっ！」

二度目となる絶頂を迎えたのだった。

※

「……はぁ……はぁ……しんじゃうし……これ、やばいって……」
息も絶え絶えになったサーナは、身体中を汗まみれにしていた。褐色の肌に、玉のような汗が浮かんでいる。
シーツはべっしょりと濡れ、足を開きっぱなしの股から、失禁したと勘違いするほど蜜を撒き散らしていた。
無防備にも力を抜いて横たわる黒ギャル少女の姿を目にした幸人は、もう我慢の限界だった。
「……サナ」
短く名を呼ぶと、少女と目が合う。
「もち、ここで終わらないし。こっからが本番だし。きて、ユッキー」
サーナに求められた少年は、ハーフパンツをずり下ろし、痛いほど硬くなった陰茎を露わにする。
「……すごっ。え？　うそ、こんなの入んの？」
少女に握られただけで、ずっとお預けを食らっていた男根は、出番を待っていたとばかりに大きさを主張していた。
「やばば。超でっかいんですけど……男の子ってみんなそうなの？」

「他の人のは見たことないけど、俺のだって特別大きくないんじゃないかな？」
大きく目を見開いて、陰茎の大きさに驚いている少女に、男の自尊心が満たされていく。
平均的なサイズだと自覚していたが、少女にとってはそうではないらしい。
「ユッキー、早く、アタシのこと女にして？　大人の、ううん、ユッキーの女にして？」
「わかった。いくよ？」
ゆっくりと足を広げて、露わにした少女の割れ目に、先走り汁の浮いた亀頭をあてがう。
「入れるよ？」
「きて、ユッキー！　アタシの未使用のアソコに、ユッキーのちんちん入れてぇ！」
自らを鼓舞するように声を大にした少女の合図に、幸人は腰をゆっくり動かした。
割れ目に陰茎が埋没していくと同時に、脳の血管が焼き切れそうな快感が股間から這い上がってくる。
（――っ、サナの膣内っ、火傷（やけど）しそうなほど熱い！）
未使用の膣内は狭く、異物である男根を拒んでいるかのように感じた。だが、愛蜜が潤滑油となって確実に少女の奥へ、亀頭が押し進んでいく。
「あっ……はっ、はぁっ、入ってっ、くるぅっ……お腹っ、抉じ開けられてるぅっ」
閉じた膣壁を掻き分けていくと、コン、と壁にぶつかった。
（これって、サナの処女膜？）

「ユッキー、ユッキーっ、我慢するから、痛くても我慢できるからっ、奥までっ、アタシのお腹の奥まで入れてっ！」
少女の懇願に対する返事は、勢いよく腰を動かすことで応じた。
「あ、ああ、入って、きたぁ……」
ゴムを引きちぎる感覚が陰茎に伝わると同時に、少女の顔が痛みに曇る。
「痛いっ、超痛いからっ！　しんじゃうっ、しんじゃうじゃんっ！　ユッキーっ、はやくっ、おねがいぃっ！」
痛いほど狭い膣肉と処女膜を貫き、膣奥に亀頭が収まった。
「はぁはぁ……全部、入ったの？」
「うん。サナのお腹の中に、全部入ったよ？」
「アタシ、超頑張ったんですけど」
「わかってる。よく頑張ったね」
汗と涙を流しながら、達成感を露わにする少女に口づけする。
額に、頬に、唇に、繰り返し、キスの雨を降らせていった。
「ちゅうっ、ん、ちゅっ、ちゅぅ、んむっ……ユッキー、動いていいよ？」
「でも……しばらく待ったほうがいいんじゃないかな？」
「そんなこというけど、お腹の中でめっちゃびくんびくんしてるんですけど。アタシの中

で精子出したいっしょ？　我慢しなくていいじゃん？」
「いいの？　動き出したら、我慢できないよ？」
今はサーナの身体を思いやって必死に堪えているものの、一度でも腰を動かしてしまえば、射精するまで止められる自信はない。
「もちっしょ。最後までやんなきゃ、ギャルじゃねーから。それに……アタシ、たくさん気持ちよくしてもらったから、ユッキーにも気持ちよくなってもらいたいし」
「サナ……動くよ」
こくん、と頷く少女にもう一度キスすると、力強く少年は腰を動かした。

※

膣の入り口まで男根を引くと、少年は膣奥めがけて一気に突いた。
「あああああっ、ユッキーっ……奥っ、奥にっ、ゴンって、当たるぅっ！」
サーナの膣奥深く、少年の陰茎がぶつかる刺激が、背筋を通って脳天に届いていく。
未使用膣を開通された痛みは、鈍痛として下腹部に残っている。動くことさえ苦痛に思えたが、少年が腰を動かすと同時に、痛みが和らいだ。
（え？　なんで？　意味わかんないし！）

破瓜の痛みは想像以上だったはずなのに、少年の陰茎が膣壁を削る度、甘い痺れが痛みをかき消そうと下腹部で暴れ出した。
「ゆ、ユッキー、もっとっ、ああっ、ゆっく、りっ、してぇっ……アタシっ、身体がっ、変なのぉっ」
痛みは今でもある。だが、それ以上に快感と刺激が伝わってくる。
異性に縁がなく、三一七年も処女だった黒ギャルにとって、幸人との行為は初めてだらけだった。
「痛いのにっ、気持ちいいのぉっ……アタシ、おかしくなるじゃんっ！」
「サナって痛いのが気持ちいいんだ？」
「え？」
幸人のいっている意味がわからず、つい間抜けな声を出してしまう。
（痛いのが好きって、なにそれ、意味わかんな……嘘、アタシ、マゾってことじゃん⁉）
「違うしっ——ああっ、動かないでよぉっ、マゾじゃっ、ああっ、んんっ、んっ、あああっ、ねーしっ、ありえないっ、しっ！」
そんな変態じゃない、と文句をいってやりたかったが、少年の男根に膣奥を突かれると、会話にならない。
（痛いの気持ちいいとかありえないし！）

今の快感だって、痛いからではない。少年が懸命に、肉棒を突き動かす刺激が快感となって襲いかかっているのだ。
そう自分に言い聞かせながら、下腹部に伝わる衝撃が甘い響きとなっていくのを感じた。
（これ痛いから気持ちいいんじゃないし、ユッキーのちんこが気持ちいいだけだしっ）
なぜこうも必死なのか理解していないサーナだったが、次の瞬間、太ももの内側に痛みが走り、
「ひぁあああああっ、うそっ、なにこれっ、痛いのにっ、痛いのにぃ――っぁあああああああああっ」
三度目となる絶頂を迎えた。

※

（や、やり過ぎちゃった？）
愛蜜を吹き出して痙攣したサーナを尻目に、幸人は驚いていた。
黒ギャルエルフの少女が痛みを快感に変換できる性癖の持ち主だと、うっすら気づいていたのだが、認めようとしないため確かめてみようといたずら心が芽生えたのだ。
正常位で繋がっているため、大きなお尻を叩くことはできない。そこで、目に入ったの

が健康的な太ももだった。
　軽い気持ちで、抓ってみたところ唖然とするほど少女が甘い悲鳴をあげたのだ。そして、お漏らしのように蜜を撒いて、絶頂してしまった。
「サナ、大丈夫？」
「ユッキー……アタシ、今……」
「イっちゃったね？」
「これが、イクってやつ？　……こんなに、すごいんだ……」
　焦点が合わない目をした少女は、絶頂と同時に味わった快感に飲まれ呆然としていた。
　だが、すぐに瞳に光が戻ると、慌て出した。
「――っ、違うし！　イってないから。痛くされて、イくとかありえないっしょ！」
「可愛いかったよ」
「っっ――そういう問題じゃねーし！　ユッキー、アタシ怒って……ひゃんっ、こらっ、急に動くなしっ、イって敏感になってるのにっ、そんな奥ばっか突かないでぇっ！」
　サーナの初々しい反応と、被虐属性を認めたくない抵抗があまりにも可愛くて、我慢ができなかった。
　絶頂し、涙やよだれさえ流したダークエルフの姿は、いやらしいの一言であり、少年の高まった欲望にも限界が訪れかけていた。

それでも少女の膣をもっと味わいたい欲求から、奥歯を食いしばって我慢してきたのだが、それにだって限度がある。

今は、もう褐色少女の膣内を白く染めあげたいという願望が渦巻いているのだ。

「だめっ、奥っ、届いてるからっ。お腹の奥っ、強くしないでよぉっ」

サーナは気づいていないようだが、彼女の子宮が精液を求め下がってきていた。そのため、亀頭が届きやすくなり、少女が感じる快感も増している。

幸人は欲望のまま容赦なく、腰を動かし続ける。もう限界は近いため、下手な遠慮などする余裕は消えていた。

破瓜した少女を気遣う余裕も今はなく、ただダークエルフの膣を味わい続けたいと貪り続けるだけ。

「ユッキーっ、またっ、くるぅっ……イくっ、イキそうっ、なんでっ、こんなにっ」

「サナっ、一緒に！」

「うんっ、ユッキーっ、一緒にイこうっ、気持ちよくなろっ」

お尻に腰が容赦なくぶつかり、下半身を濡らしていた愛蜜が飛び散っていく。

肉と肉がぶつかりあう音に混じって、蜜まみれの膣をかき回す卑猥な水音が部屋に木霊（こだま）する。

「もうっ、限界っ、ユッキーっ、もうっ、イくっ、イくからぁっ！」

白ギャル少女アリアは、暴れる鼓動を必死に抑え、羞恥に震えながら自らの下着を先輩と呼ぶ少年に見せつけていた。

（うわーっ、うわーっ、これじゃ痴女っすっ、ビッチっす！　ウチ、ギャルなのにっ！）

呼吸が荒く、吐き出す息はドラゴンの吐息のように熱い。自分がしている行為が恥ずかしく、毛穴から炎が吹き出しそうだ。

（ウチってチョロすぎっすよぉ。先輩に胸キュンしちゃったじゃないっすかぁ！　でも先輩がいけないんすよぉ、ウチに優しくするから！）

媚薬効果を受けているにもかかわらず、自分本位ではなくアリアを気にしてくれる少年らしい優しさに、少女はときめいていた。

（我慢っす、我慢するっすっ！　もし、ここで先輩がウチのことを押し倒してくれれば――念願のエッチができるじゃないっすか！）

今まで誰にもいったことのない秘密。それは、アリアは一度としてセックスをしたことのない処女だった。

愛嬌のある気やすい性格と、人懐っこさから異性から人気があることは少女自身が自覚していた。それでも誰とも付き合うことなく、身体を重ねることもなかったのは、ひとえに心から好きになった人とでなければエッチしたくなかったのだ。

軽い感じがあるのか、それともいつか初体験を迎えるためにエロ本で勉強した知識が豊富のせいか、男性経験が豊富と誤解されていた。始めは軽い感じで、友人にアドバイスをしてみたところ、大成功だった。すると、経験豊富のアリアに相談すると男女関係がうまくいく――そんな噂が立ってしまい、引くに引けなくなった。

耳年増なおかげでアドバイスには困らなかったが、結局、この人だと思う相手に出会えないまま二百年の月日が流れてしまった。

普段、サーナを処女だ行き遅れだとからかうが、それは仲間がいる安心感からだ。彼女が怒ってくれることで、同類がいるのだと安心することができていた。

しかし、サーナが自分の知らないところで女になっていた。一人前のギャルになり、先に進んでしまった。

あろうことか、初めて見た瞬間に気に入ってしまった異世界の少年と、だ。

抜け駆けだと思った。ズルいとも思った。そして悔しかった。

幸人が自分の運命の相手ではないのだと悲しくもあった。

(だけど今は違うっす。先輩はウチのことを見てくれてるっす。媚薬だって興奮させても好きじゃない相手ならセックスしたいなんて思えないはず。つまり先輩は、少なからずウチのことが好きってことっす)

ならばサーナに先を越されようと、幸人とエッチしたって構わないはずだ。

二人が恋人になったと聞いたわけではない。慰めるために身体を使ったといっていた。
（サーナさんだって先輩に本気ってわけじゃないはずっす。なら、ウチがエッチしたっていいっすよね？）
獣のような目でショーツを見つめられていると思うと、触れずとも秘部から蜜が溢れてくる自覚があった。薄手のショーツは間違いなく濡れてしまっているはずだ。
（どうっすか？　未経験ギャルのパンツっすよ？）
アリアにとって幸人は運命の人ではないかもしれない。それでも、気に入っていることは確かで、誰かに取られてしまうのはおもしろくない。少女だって、無意味に少年のことを先輩なんていっているわけではないのだ。少なからず好意を抱いているからこそ、距離を縮めたかったのだ。
（これ、言っちゃったらどうなるっすか？　ウチが処女だっていったら、先輩は引いちゃうっすか？　それとも喜ぶっすか？）
打ち明けるのが怖い。しかし、伝えたかった。
「先輩だけにいいこと教えてあげるっす」
興奮を我慢する少年の視線が、少女のショーツから顔に向く。
不安を隠し、精一杯の笑顔を浮かべると、少年に喜んでもらいたい気持ちを込めて、
「実は、ウチ……エッチしたことないっすよ？」

挑発するように、誘惑するように、熱い吐息とともに少年に告げる。
ごくり、と少年から唾を飲む音が聞こえた。
「サーナさんのことからかっていましたけど、エッチな本で蓄えた知識だけの耳年増なんです。引いちゃったっすか？」
「そんなこと、ないよ」
「先輩の視線がめっちゃアソコにあたるっす。そんなに未使用だったのが嬉しかったんっすか？」
ショーツの向こう側の秘部が見えてしまうのではないかと錯覚するほど、熱い視線が性根から放たれる。
少年の男根がズボン越しに跳ねているのがはっきりと見て取れた。
「ウチが処女だって知った途端に、さっきよりもちんちん大きくして恥ずかしくないっすか？」
興奮を促すように挑発する少女は、あえて嗜虐的な言葉を選ぶ。優しい幸人は好きだが、今は強引にして欲しいからだ。
「ウチの未使用の穴を独占したくないっすか？　先輩がウチのことたくさん愛してくれるなら、未経験マ〇コにおちんちん突っ込ませてあげるっす」
今にも押し倒してきそうな少年の吐息が当たる。身体が触れ合う直前で耐えているのは、

幸人の自制心が強いからか、それともっと誘惑しろと催促しているのか。
アリアは後者だと勝手に思うことにした。
「ウチの新品膣内でたっぷりシゴいてあげるっす。ほら、我慢なんてすることないっす。先輩のエッチな欲望を全部ウチが受け止めてあげますから、豚みたいに喜んでいいんすよ？」
刹那、我慢の限界を超えた少年がアリアの小柄な身体をベッドへと押し倒した。

※

「きゃっ――先輩ったら強引っす」
度重なるアリアの誘惑を受け、興奮の限界を通り越してしまった幸人は、暴発しそうなほど硬くなった男根に従い、少女を勢いよく押し倒した。
ベッドのスプリングが軋み、短い悲鳴をあげて、白ギャル少女が仰向けとなる。
抵抗はない。スカートはめくれ上がり、眩しい太ももとシミの着いた水色のショーツが露わになっている。
汚れひとつない白い肌に手を伸ばすと、
「んっ」

くすぐったそうに少女が身をよじった。
「先輩、ちゅーしてほしいっす」
そのまま指をアリアのショーツに向けようとすると、切なそうな声が届き、少しだけ冷静になる。
（落ち着け、興奮してるからってアリアに強引なことしちゃダメだ！）
いくら媚薬のせいで興奮しているからとはいえ、少女の望まないことをしたくはない。彼女が今の自分を受け入れただけではなく、初めてまで捧げてくれるというのなら、最高の時間にしたいと思うのだ。
「お願いっす……ちゅーしてくれたらたくさんエッチしてもいいっすから……」
二度目の懇願を受け、少年は沸き立つ欲望を抑えて少女に覆いかぶさり、彼女の唇に力強く己の唇を押し付けた。
「んぅ……んむっ、ちゅっ、ちゅぅ」
触れるようなキスから、啄ばむように繰り返していく。
「ふぅうぅ……ウチ、キス初めてでした……胸がドキドキします」
ファーストキスを味わった少女は、潤んだ瞳を少年に向けて微笑んだ。
（アリア……可愛すぎるだろっ！）
その姿があまりにも愛らしかったため、少年の男根が暴発しかけてしまう。

意識しているのか、そうでないのかまではわからないが、アリアの行動ひとつが少年の興奮を掻き立て理性を破壊するには十分過ぎた。
（これ以上は、無理だっ！）
「アリアっ」
「んんむっ、ちゅるっ……んんんっ、せんぱっ、強引っ……ちゅっ、ちゅうるっ」
ついに我慢の限界を迎えた幸人は、アリアの唇に貪りつく。
手足を押さえ、舌を強引に少女の口内に押し込み蹂躙する。少女の舌を、歯を、歯茎を、頬の内側を、あますことなく自らの舌で力強く、かつ丹念に舐めていく。
「ぢゅちゅぅ、あむっ、ちゅるぅうぅぅっ……むぶっ、ぢゅっ、ちゅぢゅるぅぅっ」
もうキスとはいえず、舌と口を性器に見立てた口淫だ。
アリアに呼吸する間さえ与えずに、飽きることなく唾液をすすり、少女の口内を味わい尽くす。
喉が潤うほど少女の唾液を飲んだ少年の陰茎は、パンパンに腫れあがっていた。
（アリアの中に出したいっ）
媚薬効果と興奮を我慢し続けた少年の理性は焼き切れつつある。今でさえ、欲望に任せて少女に乱暴しないことが奇跡だった。
「……あふぅ……ウチ、とろとろになっちゃったっすぅ……」

唇を離した少女は、身体を弛緩させて大の字になって惚けている。
無防備に成り果てたアリアの姿に、ぶつん、と少年の理性が完全に切れた。
「アリアっ！」
興奮に従い、限界が訪れかけていた陰茎を一気に露出させる。
「――っ」
わずかに少女が息を飲む声が聞こえたが、少年に気にしている余裕などなかった。
先走り汁で亀頭のみならず、陰茎全体が濡れている。
少女の膣奥に収まりたいと主張するように、触れていないにもかかわらず敏感になり過ぎて跳ねていた。
少年は手を伸ばして濡れて割れ目が浮き出ているショーツを掴むと、横にずらした。
「――ッッッ！」
秘部を露わにされてしまい、羞恥から顔を真っ赤にして両手で覆ってしまうアリア。
少女の股間は湯気を立てるほど濡れていた。薄い陰毛はハート形に整えられており、卑猥さが伝わってくる。
透明な蜜を溢れさせる秘部は、ピタリと閉じており、未使用であることを窺わせた。
これから迎える破瓜に不安と恐れを抱き、震える少女に気遣う余裕などなく、少年は亀頭を割れ目に押し当てた。

「先輩……ウチ」
「アリアっ、入れるぞ？」
いざ貫かんとした刹那、アリアの声が聞こえ、わずかに理性が戻る。
処女幕を破る前に、せめて声だけでもかけようと動かしたい腰に、全理性を集中させる。
「覚悟は決まってますっ。ずっと処女だったこと先輩にだけ打ち明けたんすから、先輩のおちんちんでウチを一人前のギャルにしてください！」
覆っていた顔をしっかり見せて、不安と決意、そして期待を込めた瞳でアリアは幸人に自らの意思を伝えた。
そして、少年の返答は――一気に腰を動かすことだった。
愛撫せずとも、強引なキスで蕩けきった少女の膣内は蜜に溢れていた。細い体躯（たいく）に備わる膣は、狭く、痛いほど締め付けてくる。
亀頭が膣壁を掻きわける度に、痺れるような快感が陰茎を経由して脳に伝わってくる。サーナとは違う、膣の感覚が波のように届いては、射精感を煽っていく。
（アリアの中っ、キツ過ぎるっ）
今にも達しそうになるも、陰茎が全てアリアの膣内に収まったわけではない。
男の欲望は、精を解き放つなら膣奥でしろと叫んでいる。その欲望に従い、さらなる奥に亀頭を進めると、先端が壁にぶつかった。

「……ああっ、ウチの処女膜……先輩に破られちゃうっすね……お願いします、先輩。ウチを先輩の女にしてください！」
「アリアっ！」
少女の願いを聞き届けるため、幸人は腰をより深く動かした。
次の瞬間、ゴムが引きちぎれるような感覚が陰茎越しに伝わる。
「いづっぅうううううううっ、痛いっすっ、痛すぎっすっ！　こんなの、本じゃ書いてなかったっす！」
額に脂汗を浮かし、涙をボロボロと流し始めるアリアだが、決してやめてくれとはいわなかった。
制止を求めない少女の膣奥にさらに陰茎を進めた。
自らの肉棒で少女の破瓜を散らしたことが、征服感と欲望を掻き立て、少年はもう絶頂寸前だった。
（アリアの中を汚したい、孕ませたい！）
先輩と呼びながら、どこか生意気な少女を自分のものだと記したい。
少年の欲望が最大に膨らんだ刹那、陰茎が全て少女の膣奥に収まった。
その刹那、
「アリアっ、出すぞっ」

――びゅるるるるるるっぅぅぅうううっ、どびゅるぅっ、ぶびゅるるるっ！

かつてない量の精液がアリアの膣奥に放たれていく。

「熱ぃいいいいいいいいっ！　お腹っ、やけどしちゃうっすぅうううっっ！」

生まれて初めて膣の奥へ射精されたアリアは、下腹部に宿る熱に絶叫をあげた。

念願叶って破瓜を迎えただけでなく、好意を抱く少年とひとつになれた喜びが、少女にこの上ない幸福感を与えていく。

「ウチ、嬉しいっすっ、先輩っ、好きっす、好き好きっすっ！」

告白しながら、アリアの下半身が大きく跳ね上がる。度重なる、身体と心への刺激に、絶頂を迎えたのだ。

少女と繋がったままの陰茎が、痛くなるほど締め付けられる。勃起は収まらないが、射精したことで理性を取り戻した少年に再び興奮が高まってしまう。

「アリア……ごめん、乱暴にしちゃった」

「いいっすよ。ウチ、嬉しかったっす。それに、先輩とひとつになれて、その……イっちゃったっす」

恥ずかしげにそんなことをいうアリアは小生意気な雰囲気はなりを潜め、とてつもなく可愛いらしかった。

「先輩のおちんちんまだ固いっすね……」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/